

書評

『復興は教育からはじまる ——こどもたちの心のケアと共生社会に向けた取り組み』

(細田満和子・上昌広編著 明石書店)

鬼頭 秀一

福島第一原発事故による福島の被害とそれからの復興の課題は3年半以上経った現在、まだまだ道半ばの感がある。放射能汚染と低線量被曝の問題は、事故直後の行政や行政から意を受けて対応した専門家の人たちの対応が過度に安全側に偏った対応をしたことへの住民側の不信感もあり、また、その後の専門家の意見も収束することなく多様な見解がさまざまなメディアを通じて拡がっていったこともあって、被災者の人たちは翻弄され、それぞれがそれぞれの責任において避難するか留まるか、また避難から帰還するのかなどの選択をせざるを得ないところに追い込まれている。メディアを通じて問題化されるのは、甲状腺がんや嚢胞など、放射線被曝の影響に起因する健康への影響の是非である。しかし、影響があるかないかという以前に、また、避難するか留まるかという選択にかかわらず、絶えず不安を感じつつ、さらに、不安を表明すること自体も憚られるような状況の中に追い込まれている。原発事故による「被害」は、直接、間接の健康への影響の有無というより、そのように被災者が精神的に追い込まれている事態の中にある。

本書は、福島第一原発事故直後からいち早く福島県の相馬地域に、教育の現場へ支援に入った星槎グループの関係者とその動きと連携してその相馬地域で医療支援を積極的に行ってきた東大医科研の上昌広特任教授のグループの相馬地域での被災者支援のレポートであり、またそのことの意義を明らかにしようとした書物である。教育の現場への支援と医療支援ということが福島原発事故の被災地にとって重要なのは、冒頭で述べたように、原発事故被害というものが、まさにその部分に集約して現れていたからである。その意味では、現在、被災地でもっとも重要な領域に被災地支援として関わってきた現場での報告であり、これが出版されたのは大変意義深い。

放射線被曝の影響に関するさまざまな医学的な試みや、放射線被曝を防護するための除染も含めたさまざまな科学的、医学的な対応はなされてきたが、被災者にもっとも寄り添い、その被害に向き合うのは、日常的な医療行為による定期的な内部被曝などの健診であった。被災者にとっては、放射線被曝の影響について断片的な調査やそのことに基づく言説より、全住民に対して定期的な健診できちんとしたモニタリングを行い、医師がその被災者に真摯に向き合い、不安を聴きつつもそこで精神的なことも含めてケアしていくことこそが重要で

あった。相馬地域は被災地の中でも先進的にそのことが可能になっており、それは坪倉正治医師を初めとする上昌広グループと現地の医療関係者がその仕組みを作り上げていったのである。

もう一つの側面として重要なのはこどもの精神的なケアである。避難しても留まっても、また、除染をしたとしても、さまざまな形で精神的な不安の中に被災者の住民は置かれているが、その不安がもっとも噴出していく先が子どもたちであるといっている。子どもたちは親たちのさまざまな不安を含めたものをすべて受け止めている。その子どもたちに最も寄り添い、対応せざるを得ない中で、心のケアを行いつつ関わってきたのは、養護教員であろう。井戸川あけみの事故直後からの対応の様子がリアルで迫るような形で書かれている。そしてそれと呼応するような形で、星槎グループの特別支援教育を専門とする教員たちがカウンセリングのサポートをしており、その視点からの報告が続く。

子どもたちの揺れ動く心に寄り添うスクールカウンセリングの専門家としての役割など、興味深い論考が多く続くが、その中でも、西永堅の特別支援教育の専門性に立った指摘は重要である。障がいのある子どもたちに対して、問題点を見つけてそれを改善していくという従来のリハビリテーションモデルではなく、むしろ「障がい受容」により、ゼロからのスタートで新しいものを作っていくというリハビリテーションモデルでなされる特別支援教育のあり方の適用の必要性を西永は被災地に見いだしている。被災地支援は、原状回復に重点がおかれ、リハビリテーションモデルに基づくものになりがちであるが、むしろ、ポジティブな新しい価値を創ることこそが必要であるというのである。この指摘は、吉田克彦の、現在の非日常的な状況から元の日常を取り戻すのではなく、むしろ、新しい日常を生み出すことが重要であるという指摘と重なっている。また、三森睦子が、学習支援の視点から、本人の強みと困っているところの把握から、見えなかった能力の発見を通して、未来を切り拓くサポートをしようとするこどもとも繋がっている。このような特別支援教育ならではの視点が、「復興」ということに対して、子どもたちのこころのケアをどうするのかということに対して、大変意義深い視点を与えてくれる。このような教育支援は、ある意味では、特別支援教育を軸とした教育支援を行った星槎グループでこそ可能なことであり、大変重要な視点であると思われた。

災害に対応するにあたって教育の視点の重要性について、「災害教育」として、教育の現場に災害を学びの機会として積極的に取り入れる必要性を説く越智小枝の論考は本書の重要なまとめになっている。「災害教育」の必要性の視点は、東日本大震災後の教育のあり方として他でも議論がされており、これから重要な領域になっていくと思われる。

放射線被曝に関しては、細田満和子がこどもの親の立場での事故直後からの、さまざまな逡巡の中から、多様な活動をしながらも、その不安に真摯に向かい合う一人の被災者の社会的分析をする中からその本質に迫っている。この論考は、相馬地域で内部被曝の定期的な健診を行いつつ、被災者の不安に真摯に向かい合う視点からの放射線教育のあり方を提起している坪倉正治の論考と対比的であり、お互いに補い合う論考となっている。

本書は、さらに、今まで述べてきた、復興にかかわる教育の側面からのアプローチの重要性の提起に加えて、現地の教員の人たちがさまざまな形で活動されている方々のレポートを

収録しており、この相馬地域での復興の問題を立体的に表現しようとしている。さまざまな視点からの問題の捉え方が、教育を主眼として復興の問題を捉え論じようとしている本書を魅力あるものとしている。

そして、最後に、上昌広は、星槎グループと上グループが相馬地域に関わり始めた経緯を手短かにまとめている。「本気で動く人たちが変えていく」という表題の通り、このような「支援」には、機動力がある人たちが状況に応じて機敏に動き、被災者の人たちの心に真摯に寄り添うということが重要であることが、改めて明確にされている。本書全体が、それぞれの人たちが、それぞれの持ち場を認識し、真摯にしかも機敏に動き、自らの専門性に則って対応してきた全体像を示すものになっており、大変興味深い。

被災地である相馬地域は、当然のことながら、まだ復興のプロセスは収束していない。放射線被曝の問題は消えることはなく、これからも深くのしかかってくる。一方で、政府や東京電力は補償を打ち切ろうとしており、全国的にはますますここでの被害も風化させられつつある。このような状況の中で、本書のような形で、医療や教育において、一定の成果は収めてきたものの、この地域が、生業も含めて内発的な形で持続可能な地域社会を構築するべく、復興のあり方を問い直すことはますます必要になってきている。このような新たな段階に来た現在、本書の成果をどのような形で継承し、次の段階に発展させていけるのか。そこは大きな課題である。その後の展開を期待したい。